

明暗

映画文学人生論

原作：夏目漱石 (1915) 「朝日新聞」
参考：水村美苗『続明暗』 (1990)
参考：全日記小津安二 (1993) 「フィルムアート社」
参考：『早春』 監督：小津安二郎 脚本：野田 小津
出演：杉山正二 池部良 撮影：厚田雄春
杉山昌子 淡島千景 音楽：斎藤高順

どうしてあの女はあそこへ嫁に行ったのだ
ろう

『明暗』は夏目漱石が残した未完の小説。文学の専門家の間では日本語で書かれた近代小説の最高傑作と評価されているようだが、一般読者にはあまり読まれていない。私も若い頃、読みかけて退屈し、途中で投げ出してしまった。

退屈した理由の一つは主人公に魅力がないことだ。津田由雄は三十歳の会社員。半年前に結婚したお延と所帯を持ち、生活費の一部は父親から送金してもらっている。妻のお延には高価な指輪を買ってやるなどしているが、以前につきあっていた清子への未練を断ちきれない。

「どうしてあの女はあそこへ嫁に行ったのだろうか。それは自分で行こうと思ったから行ったに違いない。しかしどうしてもあそこへ嫁に行くはずではなかったのに。そうしてこの己はまたどうしてあの女と結婚したのだろう。それも己がもらおうと思ったからこそ結婚が成立したに違いない。しかし、己はいまだかつてあの女をもらおうとは思っていない。偶然？ ポアンカレのいわゆる偶然の極致？ なんだかわからない」。などと考える津田はダメ男だ。経済的にも精神的にも自立していない。高等遊民でもない。私も三十歳の頃は似たようなものだったが、自分のことは棚にあげて、こんなダメ男の描写を読むと、むかついてくる。



明暗

映画文学人生論

それでも、二人の意外な人物が『明暗』に関心を示したとことを知って考え直した。『続明暗』を書いた帰国子女の水村美苗と映画監督の小津安二郎である。文学の専門家ではなく、異次元の世界に住むこの二人が面白いと思った小説ならやはり面白いのではなからうか。

『続明暗』については、稿をあらためることにして、小津安二郎と『明暗』とのかかわりについていえば、昭和二十八年一月二十三日付の日記に「炬燵で明暗を読む」と書き、翌日、翌々日も読み続けている。三日間で読破したらしい。

小津監督が『明暗』を読んだ余韻がどの映画に反映されているかという点、時期的に昭和三十一年公開の『早春』ではないかと思う。

『早春』の主人公は下っ端のサラリーマン杉山正二（池部良）。その妻（淡島千景）との関係は『明暗』の津田由雄とお延との関係に雰囲気似ているかもしれない。正二は同じ会社の同僚の金魚（岸恵子）とマチガイをおこしたが、会社の人事で岡山県三石の工場へ転勤になったのをきっかけに金魚と手を切り、妻と和解する。

未完のままの『明暗』の結末が、サラリーマンの哀歓を描いた映画『早春』の結末のようになるかどうかはわからないが、少なくとも小津安二郎の世界では夫婦の和解となっている。

「明暗」をよむ監督の春炬燵